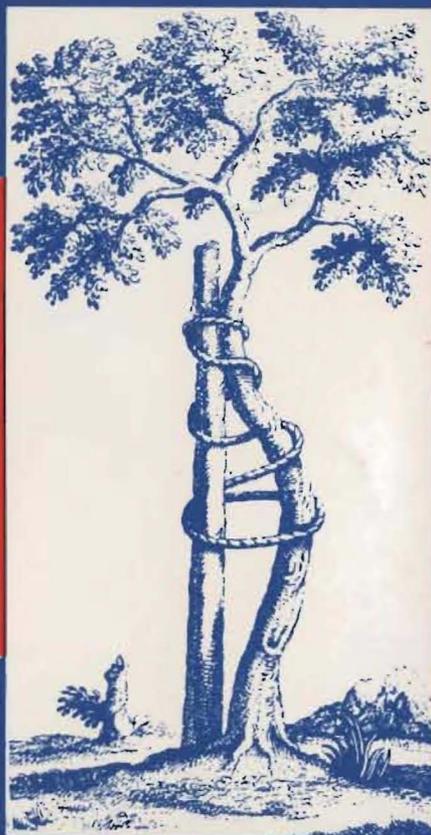




ふるさと



(昭和52年12月)

目次

一、会長就任一ヶ年の回想……………	1
慶応義塾大学医学部整形外科同窓会々長	
伊藤原	
二、慶応義塾大学整形外科教室創設当時の想い出……………	2
名誉教授 前田和三郎	
三、お詫びの口上……………	4
名誉教授 岩原寅猪	
四、学会雑感……………	5
第二〇回日本手の外科学会々長	
第二十六回東日本臨床整形外科学会幹事	
池田亀夫	
五、東日本臨床整形外科学会を終って……………	6
第二十六回東日本臨床整形外科	
学会幹事 泉田重雄	
六、物故会員のお報告……………	8
七、新人紹介……………	9
八、編集後記……………	17

会長就任一ケ年の回想

慶応義塾大学医学部整形外科

同窓会々長

伊藤 原

昭和二十一年岩原先生が整形外科教授に就任されて間もなく、前田先生のご了解のもとに整形外科教室関係者だけを刀林会から分離し整形外科同窓会が独立発足した。

以来三〇有余年を経て今日に致っているのであるが、その間会則も一部の修正はあったものの当初の通りに運営されてきた。昨年、諸般の状況を含め総会において幹事より画期的な会則変更が提案され、審議の結果これが新会則として承認され、即日実施ということになった。

総会后、委員会に於いて委員の方々より会長就任についてたびたびの要請があり、微力 才を顧り見ずお受けした次第である。新発足第一年目の重職であり、一歩進路を誤るならば会の将来に暗影を投ずるおそれがありこれは大変な仕事を引受けたものと心のいたむものがあった。幸いにして有能かつ適任の幹事諸君が居られるので、その支援のもと職責をはたしたいと願っている。

新発足にあたり、何か新しい仕事をと幹事の皆さんと相談しているが、さで具体化ということになるとさまざまな支障が伴う。会の動向もふまえ今後とも検討を続けたい。

同窓会のあり方についてはいろいろな論議もある。だが一年一回の会合のみで会に対する関心や、相互の親睦がはかれるというものではない。私は最近、会員の会に対する期待が段々薄らいでいるように感じられてならない。私だけの僻みであるならばご容赦ねがいたい。おなじ学舎を出て、学の内外にあってそれぞれ社会的に活動している仲間なので、相互の関係が緊密でなければならぬ。「和なきところに繁栄なし」という名言もある。会員も、会を主催する側も一つになって、お互の交流と親睦に役立つ魅力ある会とするよう努めていただきたい。事業等についても大いに各位の提言を期待するものである。

今年の両学会開催にあたっては御協力をお願いしたところ、会員の皆さんから多額のご支援をいただき、盛会裡に終了いたすことができた事をご報告いたし、ご芳志に対し改めてお礼申しあげる次第である。

慶応義塾大学整形外科教室

創設当時の思い出

名誉教授 前 田 和 三 郎

私が慶応義塾大学に迎えられて国立熊本医科大学を退任し、上京して来たのは昭和三年の暮れの事であった。早速三田の本塾に行き鎌田塾長に御挨拶をした。そしてその時辞令をいただいた。内容は前田和三郎君を慶応義塾大学教授に任ず。その日付は昭和三年十二月三日とあった即ち私の着任は昭和三年十二月三日である。医学部長の北里柴三郎先生は御存知であったが、病臥して居られたので主事の北島多一先生が部長業務を代行して居られたので御挨拶に出た。先生はよくやって来てくれたとおっしゃった。その後一週間ほどして部内通報が出て医学部整形接骨科を改称して医学部整形外科教室となし前田和三郎教授をその主任とするとあった。前田友助教授は既に退任し赤坂に病院を建設し開業しておられた、又桂秀三助教授も退任して御茶の水に病院を設け開業しておった。前田友助君は外科の講師という名を残し週一回外科各論の講義をやりこられた。扱て私は着任後直ちに外来カルテ、入院カルテを検して見ると実にずさんで開業医のカルテの様で学問的にはまったく価値がない。カルテは学問の基礎となるものであるからこれを改造した。そして最後の診断名はいちいち自分で書きこんだ。又これを然るべく分類し年度別に製本した。

私が着任した当時教室員としては五回の亘理祐邦助手唯一人であった。これでは業務がやれないので外科の茂木教授に御願いして外科教室から四、五名の助手をロテートして貰うことにした。期間は半ケ年であるが希望によっては一ケ年居っても差し支えないことにした。亘理君を講師としたが家庭の都合で二年位で郷里に帰り開業することになった。八回の堀田善二郎君が入室したが一年位で基礎科に転科した。そこでロテートして来た助手の中で最も研学心のあった五回の岩原寅猪君を講師として迎えることにした。この頃から新卒業生が入室を希望する様になって来た。一〇回の野崎寛三、畠中卓助、一一回の伊藤原、小泉次郎、一二回の大内正夫、森田正朗、一三回の蓮江信行、左奈田幸夫、高橋哲二、一四回の加納保之、小紫清定、西平賀健、富田

忠良、一五回の西新助、遠山一郎、渡辺重男等の諸君が、又内地留学生として一回の高木宗吉君が満鉄より、九回の臼田正雄君が呉海軍病院より研究のため入室し整形外科教室も賑かになって来たので、外科教室からのロテートは自然と殆んどなくなつた。

外科の婦長が整形外科の婦長を兼ねていて整形外科としては外来看護婦一人であつた。当時外科の手術は外科手術を供用して居つたがここには外科専属の手術看護婦が居つて整形外科としては手術が常にやりにくかつた。そこで整形外科外来の処置室を改造して暗室となしシャリチックを手術部の上方におき時には額帯鏡を用いて深部の手術も出来る様にした。手術は主術者と男子の助手一〜二名で行い、外来主任看護婦はかんして滅菌した器具材料を手術材料台の上に乗せるだけで何んの手術も不自由なくやれる様にした。申し述べたいことは色々あるが創設当時の思い出としてはこんなところで筆を止める。



お詫びの口上

名誉教授 岩 原 寅 猪

昔語りをしたがるのは老化の徴であり、証でもある。わたくしもその例に漏れず懐古的になりがちである。腕白小僧であった時分の思い出話を綴ってみようと思ったこともあるし、昨年は求められるままに慶医五回生クラス会会報に「教職四〇年―いご、つそ、うの人生」を随筆したこともある。

教室の歴史、教室の生いたちの記も書いておいたちと思い、どっかでそれを呟いたところ、それが教室同窓会で取り上げられ実現の運びとなった。八月初から暇があれば書きつづけている。好きな読書、文学書はもちろん、脊椎髄外科関係のモノグラフ読みも、一時お預けとして、ただただ書き続けている。八〇枚余りできたが、まだ終戦に来たところで、まさに道半というところである。

そこへ同窓会幹事と教室幹事とから原稿の催促がきた。一二月の同窓会に手渡す予定の「ふるさと」に載せたいというのである。とうてい間に合いない。そうかといつて前半だけを分けて出すのに忍びない。勘弁してくれよう頼んでみたが、前田先生との関係もあるからとたつての注文であったので、ただいま執筆中のものの予告をだしてエックスキューズとする。

はじめは「教室の生いたち―岩原の足跡」として書き始めたが、いつの間にかわたくし事が多くなつてき、教室の歴史などと名乗るのは気恥しくなつたので「教室とともに―わたくしの歩み」と変えることにした。

ちょうどいま真中ごろであるから、全部で一五〇―二〇〇枚、印刷して四〇―五〇頁になりそうである。八・九月で書きあげる予定のところが一〇月になつてもまだ道なかばで、よっぱど努力しないと年内完結もおぼつかない。さりとて、いつまでも年寄りの繰り言にかかづらつてばかりはいられない。読みたい脊椎髄外科関係のモノグラフが一五・六冊座右で開かれられるのを待っている。

一層発奮しなくては！

ご容赦ください。

学会 雑感

第二〇回日本手の外科学会会長

第二六回東日本臨床整形外科学会幹事

池田 亀夫

医学部の改革騒ぎも長年月を經過し、得たものも少くなかったでありましたが、失ったものもかなりあるうと思えます。大学という学問の府、善意の集団に憎しみや怨みの心を生ぜしめ、相互不信の気持を生ぜしめたことは大きな損失と言わねばなりません。これは教育、研究を共にする関係を破壊に導くもので、先輩が苦勞して築いた遺産にすがっていくよりしか方法がないことになる。しかし毎年優秀な新人が多数入ってくるのが慶応医学にとって希望の光りである。他大学では一時の嵐は既に全く治り、一途向上に努め、新設大学は学生、職員共に建学の誇りに満ち、その基礎を固めつつある。母校医学は学外の人を含め建学当時の精神を回顧し、姿勢を正し、医学部の栄光を復活させようと努力すべき秋と思う。これが「ふるさと」の意味する同窓生全体に通じる心の共有性の保存に連結する途でもあると考える次第である。

第二〇回日本手の外科と第二六回東日本臨床整形外科学会の二つを担当するに当り、同窓会諸兄の多大の御援助により、無事成功裡に終えることができましたことを御報告するとともに厚く御礼申しあげる次第です。周知のように入会を担当するに当り、いくつかの、つまらない雑音があり、良識ある人々の顰蹙を買った場面がありました。が、実際の学会の運営振りをみてさすがに慶応だと多くの人達から称讃された次第です。

慶応大学は既に御承知のように商学部の不正入試問題で一時混乱しましたが、ようやく鎮静化したところです。この問題に対して、従来「くさいものに蓋をしろ」式のことが表面化したにすぎないとの見解もあり、同様の問題が尚陸続するかも知れませんが、新塾長は断乎たる態度で根治させる不退転の決意をもって当って当られるので、信頼して経過を注視しておいてよいと思えます。

東日本臨床整形外科

学会を終って

第二十六回東日本臨床整形外科学会

幹事 泉 田 重 雄

今年の最も大きな行事であった東日本臨床整形外科学会の幹事校として、一応滞りなく責務を果し得ましたことは、恩師、先輩の物心両面にわたる御援助と、教室員全員の一体となつての献身によるものであったことを先づ此の紙面をお借りして、厚く御礼申し上げる次第であります。

私もこの学会には発足当時から殆んど欠かさず出席致して居りますが、はじめの宗旨は裕衣姿でゆっくりくつろいで、臨床の問題を語り合おうではないかと云つたことでありました。したがって開催地も温泉が選ばれて、先づは旧きよき時代の学会のおもかげをのこしたものでありました。しかしその後色々の経緯があつて、近年は普通の学会方式で行なわれる様になり、会員も増加して、現在の様な大きな学会となつたのであります。

斯う云つた学会であつたための後胎症とも云うべき、欠陥がこの学会にはいくつか認められます。

本学会は北海道、東北、関東の各地方会の合同の会でありましようが、それらが地方会でありますためか、明確な会員制がありません。学会の案内を送るのにも困惑致します。

会員制でないために、年会費もない代り、機関誌もなく、今年度は関東整災誌に抄録を掲載させていただくことにはなりましたが、あれ丈けの立派な学会がそのままになってしまふことは誠に残念なことであります。中部日本整災学会は実に立派な機関誌があり、小さい研究会でも機関誌を発行する今日であります。

もう一つは臨床整形外科学会であることで、これも当初の宗旨に始まることであります。基礎的研究発表を拒んで参りました。会員がこの様に増加した今日、研究発表の場として本学会がもつと内容の間口を拡げてよいのではないかと私共は考えるのであります。が反対意見の方もすくなくない様であります。しかしいづれにしてもこの様な大きな学会になつてしまつた以上、

裕衣で臨床を語り合う学会にもどることはとても考えられないことでもあります。やはり学会らしい学会に育てる他ないと思います。

立派な学会に育て上げるには会員制も必要であり、機関誌も発行すべきであり、事務局も必要になって、仲々一朝一夕には解決出来ない問題が多多あります。中部日本整形災害外科学会があれだけ立派な学会運営をしていることでもあります。大いに参考になることでもあります。

処で最近では学会の数も大変に多くなり、日本医学会の分科会だけでも大変な数であり、これに小学会、研究会、同好会等を加えたら殆んど応接に違ない程であります。これに費される費用も大変な額にのぼるものと思われま。医学会専用の会場を交通の便のよい大都市に数ヶ所設置して、皆でこれを利用、運営してゆく様な構想は如何なものであらうかと更めて考えた次第であります。

物故会員

中井慎一先生



昭和五十二年九月十五日
白血病にてご逝去されました
謹んでご冥福をお祈りいたします。

略歴

明治三十八年十一月二十四日生

昭和五年 満州医科大学卒業

” ” 満州医科大学病院外科勤務

昭和十五年 慶応義塾大学医学部整形外科教室留学。

” ” 前田教授の指導を受ける。

昭和十七年 満州国安東市立病院長として勤務終戦後中共に留用となり、

天津大学、工人病院に勤務

昭和二十八年三月帰国、東大寺整肢園を創設、園長として勤務

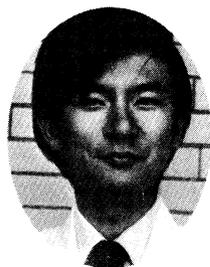
昭和四十六年 東大寺整肢園退職、その後市内桜井病院顧問

遺族連絡先 奈良市法蓮呉竹町一五一四

中井百合（夫人）

新人紹介

昭和五十二年入室



浜田 一 寿

昭和二十七年二月二十二日生

出身校 都立石神井高校↓慶大医
趣味 スキー
当科専攻の動機

外観よりも、機能を重視しているところにひかれた。

今後の抱負

七カ月目では、言葉に表わせない程の奥深い学問である
ことがわかった。



広本 明 敏

昭和二十一年十二月十八日生

出身校 広大附高↓慶大医
趣味 読書
入った動機

整形外科が一番医者らしいと思った。

入った感想

居心地最高です。



本 田 哲 夫

昭和二十六年五月四日生

出身校 慶応高校↓慶大医

趣 味 昼寝、読書

整形外科を選んだ理由

一、これからお年寄がふえるので外科系では一番将来性があると思ったので

二、リハビリに興味があったので

整形外科に対する意見

後輩の面倒見がいい先輩が多く、大きな科にもかかわらずアットホームな感じがしました。



飯 島 謹 之 助

昭和二十七年七月二十一日生

出身校 甲府一高↓慈恵医大

趣 味 ヨット、空手、スキー

当科専攻の動機

父が内科・小児科を開業していますが、整形が好きでたまらなかつたので結局整形を選びました。

入室させていた দিয়ে 光栄です。千野先生のような、えらくてやさしい先生が、医局にたくさんいらっしゃいますね！

感想



石 橋 徹

昭和十五年九月十一日生

出身校 都立大森高校↓慶大医

趣味 絵をかくこと。

入局動機

教室の雰囲気

入局感想

整形外科は守備範囲が広い。



岩 瀬 剛

昭和二十七年二月十四日生

出身校 慶応志木高校↓慶大医

趣味 錦 鯉

当科専攻の動機

メスをもてる教室と思い、いろいろ考えた結果、この整形にしました。最後に泌尿器か整形かと迷いこの整形にした次第です。

入局感想

とても活気のある教室と 생각합니다。勉強しようとする雰囲気がよく感じられます。



小林 保 範

昭和二十一年十月六日生

出身校 福井県立藤島高校↓慶大医
趣味 絵画観賞
入った動機

外科系に入りたいたと思っていましたが、整形外科の良い
雰囲気にかれました。

教室について
明るく、活気に満ちています。

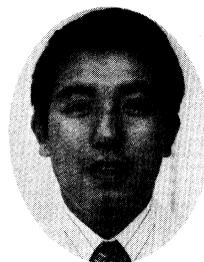


西 山 和 男

昭和二十四年十一月三日生

出身校 大阪府立高津高校↓慶大医
趣味 テニス、油絵
入った動機

感想 自分の性格にあっている
居心地の良い所です



小田 典雄

昭和二十七年八月二十三日生

出身校 慶応志木高校↓慶大医

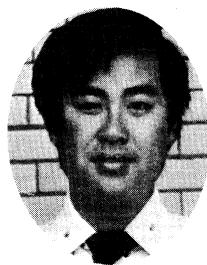
趣味 なし

当科専攻の動機

内容の新しさを感じた。

整形外科教室 etc. に対する感想

教室全体が後輩を指導することがあたりまえの様なふん
囲気になっていることに感心した。



大熊 哲夫

昭和二十六年六月二十六日生

出身校 静岡高↓慶大医

趣味 酒をのむこと、食べること

当科専攻の動機

先生方がいきいきと働いているのを見て

入局感想

上の方がよく教えてくれるのでたいへんうれしい。



崔 洙 公

昭和二十四年一月十六日生

出身校 栄光学園高等学校↓京都大学

趣味 旅行が好きですが、日本国内は殆んど行き尽して、他の

趣味を探しています。

整外専攻の動機

私は中学時代に一年、大学を出てからも二年の間、一見すると無駄に思われる道をたどりました。

今から約一年前に自分がいかに臨床医としてのセンスが無いかにも気付いたのですが、整外ならなんとかやってみようという気がしました。手術も整外のは面白そうです。

教室に関する感想

とにかく人柄の良い先生が多いので、かなり満足しています。



斉 藤 秀 夫

昭和二十五年十二月十四日生

出身校 栃木県立宇都宮東高等学校↓昭和大学医学部

趣味 音楽鑑賞、ラグビー

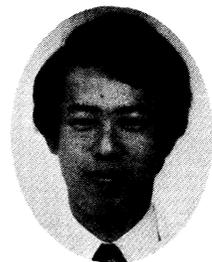
整形外科専攻の動機

学生時代より、整形外科に興味があった為伝統ある慶応

大学整形外科教室にて勉強して、一人前の医者になりたい為。

教室に関する感想

諸先生方の人格の良さと、親身のある御指導を受けている事に、大変満足し感謝しております。



斉藤正史

昭和二十五年五月二十九日生

出身校 都立立川高校↓慶大医

趣味 音楽鑑賞、スキー

当科専攻の動機

人間の機能を考える事に興味をもったため。

入局感想

環境良好



白石建

昭和二十五年九月十四日生

出身校 都立立川高校↓慶大医

趣味 無我夢中になること

当科専攻の動機

大胆、かつ繊細であるから

入局感想

大胆、かつ鷹揚な印象



高畑武司

昭和二十七年十二月二〇日生

出身校 慶応志木高校↓慶大医

趣味 日光浴

当科専攻の動機

幼少時より決めていた。

入局感想

居心地良好



編 集 後 記

戦後同窓会が誕生して何時しか三十数年が過ぎてしまいました。時は移り人は変わってすでに当時を偲ぶ同窓は半数にも及ばない事でしょう。教室では両教授を除いて殆んどの方は全く関心すらない事でしょう。而し何時か同窓会を意識する時が来ると信じます。今回は同窓会発足当時の様子を前田、岩原両先生の原稿を頂いて特集しました。諸先輩のお話しも計画したのですが、又の機会に延期します。

更に慶大整形のルーツとも云うべき教室の歴史も企画しています。御期待下さい。

同窓会の運営も伊藤新会長のもとで学内外の幹事の諸先生の御協力により有意義なものとするべく努力して居ります。それにつけても実務にたづさわる小林、村上両学内幹事の御苦勞、御尽力に感謝して居ります。

過日御逝去になった中井先生の奥様より原稿を頂きました。
有難う存じます。

同窓会幹事長

田 中 一 雄

